

# 魏と邪馬台国との関係について

横 山 貞 裕

## 序言

一、景初暦の制定改廃と干支のずれ

二、魏志烏丸鮮卑東夷伝の性格

三、魏の東方経略

1 遼東公孫氏の討平

2 高句驪征伐

3 濊貊・韓の攻略

四、魏と倭国との関係

1 魏の賜与した官爵について

2 魏と邪馬台国と大倭

結語

## 序 言

三世紀半頃、齊王芳から親魏倭王に拝仮された女王卑弥呼の邪馬台国について、これを邪馬壹国とする論や、その所在につき九州説と大和説に分れ、また卑弥呼の遣使時期については、日本書紀神功皇后三

十九年条に引用する魏志明帝景初三年の項や太平御覽や梁書に景初三年とあるも、三国志魏書東夷伝の本文には「景初二年」や「其年十二月」とあつて、たまたま当時施行された景初暦のために、記載が混乱を招き、晋書卷一宣帝紀の如きも、その開始の年の青竜五年＝景初元年と、その廃止の景初三年の年紀はこれを欠き景初三年はこれを景初二年の条に景初三年の史実を併せ記する状態である。

魏呉蜀漢三国鼎立の当時、特に呉と魏との二国にとって、東方諸勢力の援用は政局に重大な影響のあることを知って、種々の動きがあり、本論に於てはそれらについて、史実に従つて忠実に推論を試みたい。斯かる東亜政局の上に果たした遼東公孫氏・高句驪・濊貊韓や邪馬台国の役割や動きにつき、特に邪馬台国の性格や所在について卑見を申し述べたい。

## 一、景初歴の制定改廃と干支のずれ

古代中国に於て、歴と暦は同義に使用された。三国志魏書卷三 明帝紀に次の如くある。

景初元年春正月壬辰、山住県言、黄竜見、於是、有司奏、以為<sup>ス</sup>魏得<sup>ニ</sup>地統<sup>一</sup>、宜<sup>レ</sup>以<sup>ニ</sup>建丑<sup>一</sup>之月<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>正。三月定<sup>レ</sup>歴改<sup>レ</sup>年、為<sup>ニ</sup>孟夏四月<sup>一</sup>。服色尚<sup>レ</sup>黄、犧牲用<sup>レ</sup>白、戎事乘<sup>ニ</sup>黒首白馬<sup>一</sup>、建<sup>ニ</sup>大赤之旗<sup>一</sup>、朝会建<sup>ニ</sup>大白之旗<sup>一</sup>、改<sup>ニ</sup>太和歴<sup>一</sup>曰<sup>ニ</sup>景初歴<sup>一</sup>。

前漢武帝の太初元年（BC一〇四）、太史令司馬遷の下に鄧平などの曆学者多数集り、所謂太初曆が制定された。太初曆は癸亥の日の午前六時を朔旦冬至とする。その翌月の甲子の日の午前零時を朔旦冬至とするのは殷歴であり、太初歴は歳首を正月におく夏正であり、殷歴ではこれより一月早い十二月に歳首をおき、周歴はさらに一月早い十一月に歳首をおく。

史記卷二十六、歴書第四に

夏正以<sup>ニ</sup>三正月<sup>一</sup>、殷正以<sup>ニ</sup>三十二月<sup>一</sup>、周正以<sup>ニ</sup>三十一月<sup>一</sup>。（中略）十一月

甲子朔旦冬至、已<sup>ニ</sup>簪<sup>一</sup>其更<sup>一</sup>、以<sup>ニ</sup>三七年<sup>一</sup>、為<sup>ニ</sup>太初元年<sup>一</sup>。

とあり、索隱には、「改<sup>ニ</sup>元封七年<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>太初元年<sup>一</sup>。然、漢始以<sup>ニ</sup>建亥<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>年首<sup>一</sup>、今改以<sup>ニ</sup>建子<sup>一</sup>。故以<sup>ニ</sup>三七年<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>元年<sup>一</sup>」とある。

かく、漢は正月を歳首とする夏正の太初歴を使用した、王莽は十二月を正月とする殷正を用いたが、後漢光武帝は太初以来の夏正に復し、後漢に代った魏も暫く太初曆によっていたが、青竜五年を景初元年と改め殷正に抛った。これが景初歴である。蜀漢・魏・呉三国鼎立の当時、各国とも、自国が天命を受けた正統の国であることの証を瑞祥に求め、特に魏と呉はこの点に於ても激しい易姓革命の競争を演じた。

先ず魏は康延元年（二二〇）三月黄竜見るとして冬十一月黄初と改元

大赦を行った。これに対し呉も「三月鄱陽言、黄竜見」とし九月黄武と改元、翌黄武二年春、四分歴を改めて乾象曆を用いた。

魏では二二七年明帝即位し、太和と改元、呉は二二九年夏四月、夏口武昌ともに黄竜鳳凰ありとして黄竜と改元大赦を行ったが、早くも三年後の二二三年嘉禾に改めた。そして翌二年春正月、遼東公孫氏を燕王に封じ、張弥許晏らを遣わし、魏の背側を脅かす作戦に出た。

魏でもこの年春正月甲申、青竜が邾の摩陂井中に現われ、明帝は觀竜に行幸、竜陂と名付け、元号を改めた。十二月、公孫淵は呉使張弥らの首を西曹掾の公孫珩に持参せしめたので、淵を大司馬楽浪公に封じた。しかし呉の孫権はこの失敗を高句驪で挽回せんとし、胡衛らを送ったがこれまた斬られた。翌青竜五年正月魏では山住県に待望の黄竜が現われたので三月景初と改元、黄竜は土徳を得たるものとして歳首を十二月とする景初曆を制定、春三月を夏四月とする一月早めた曆を施行した。五行相生説による漢の火徳に代る魏の土徳説による改元であった。

そして早くも翌景初二年遼東公孫淵の討滅作戦を敢行するに至った。この景初歴は、尚書郎の楊偉の上表によった。晋書卷十八律曆下に楊偉の上表の全文をのせているが、太初歴、四分歴、三統歴、景初歴の歴数の詳細については本論の目的でないので省略する。三統歴は劉歆が太初曆を後になって増補した曆であり、三統曆と四分曆では一六五六年間に三統曆日数二二四八四八〇日となるに反し、四分曆は二二四八四七九日となり一日だけ少い。蜀漢はこの四分曆をそのまま引継

ぎ、呉は黄武二年、四分曆を改めて乾象曆を用いた。魏でも魏になつてから、高堂隆伝に改曆の論争や上表のあったことを記し、太和元年と改元した際、改曆もあつたらしく、明帝紀に「改太和歴二曰景初歴」とある。

そして魏志卷四齊王紀の条に

「景初三年正月丁亥朔、帝（明帝）病甚。乃立為皇太子。是日即皇帝位。大赦（中略）秋七月、上始親臨朝聽公卿奏事、（中略）十二月詔曰、烈祖明皇帝、以三月棄背天下。臣子永惟忌日之哀、其復用夏正、雖違先帝通三統之義、斯亦礼制所由變改也。又夏正於數為得天正。其以建寅之月、為正始元年、以建丑之月、為後十二月。」

とある。明帝の崩御を機に改歴したのである。景初元年に殷歴によつた歴を廢して復た夏正に復したのである。夏正による景初三年十二月は、殷歴の正始元年正月と同じ月である。この改歴の変更による月の停止は後十二月という月を生んだ。三正綜覽によれば、西紀二三九年に魏では十二月大朔丁亥、正月小朔丁巳、二大丙戌、三小丙辰、四大乙酉、五小乙卯、六大甲申、七小甲寅、八大癸未、九小癸丑、十大壬午、十一大壬子、十二小壬午という一年十三ヶ月、しかも年のはじめの十二月と年のおわりに十二月と十二月が一年に二回あつた。この年のおわりの十二月を魏志では後十二月と称したのである。

邪馬台国女王の使が魏の都に到着して詔を受けたという景初三年十二月は、即ち晋書の記す正始元年正月であり、晋書ではわざわざ魏正

始元年の、周家祿校勘記で衍字という、「魏」の字まで入れてあるのは、決して意味なしとしない魏の字である。景初二年と三年とを同年に記す晋書では其年十二月は、景初三年後十二月を指すものである。晋書卷一帝紀第一宣帝の条に

「魏正始元年春正月、東倭重詔納貢、焉耆・危須諸国・弱水以南鮮卑名王皆遣使納貢。」

と。遼東の討滅を祝して一年半後の景初三年十二月正始元年正月に、東・北・西の三方からの倭、鮮卑、焉耆危須諸国の朝賀奉獻のあつたことを記している。邪馬台国女王の遣使はこの時であつて、これを景初二年とする論が一部にあるが、それは当時の東亞國際政局の動きをつかんでいる論とは言われない。

夏正から殷歴に改めた景初年間の干支のずれは、次の表によつて知ることが出来る。景初の前後の年間を表にすれば次の如くである。

年号	月日	干支	否合	魏志
青竜四	五月(十三日)	乙卯	合	司徒董昭薨
	(十五日)	丁巳	合	肅慎氏獻楛矢
	六月(朔)	壬申	合	六月壬申詔
	七月(十三日)	甲寅	合	太白犯軒轅大星
	十月(十日)	己卯	合	行還洛陽宮
	(十五日)	甲申	合	有星孛于大辰
	(十六日)	乙酉	合	孛于東方
	十一月(一日)	己亥	合	彗星見犯宦者天紀星
	十二月(二十四日)	癸巳	合	司空陳群薨

景初元	(二十六日)	乙未	合	行幸許昌宮
正月(十二月二十四日)	壬辰	不	不	山在景言、黃龍見
五月(四月二日)	己巳	不	不	行還洛陽宮
(四月二十三日)	己丑	不	不	大赦
六月(五月十二日)	戊申	不	不	京都地震
六月(五月三日)	己亥	不	不	以尚書令陳矯為司徒
六月(五月十一日)	丁未	不	不	分魏與之魏陽、錫郡之安富
七月(七月十一日)	丁卯	不	不	上庸為上庸郡、省錫郡
七月(六月二日)	己卯	不	不	以錫郡屬魏興郡
(六月十四日)	丁卯	不	不	司徒陳矯薨
九月(八月二十五日)	庚辰	不	不	詔、遼東將吏士民為淵所脅
十月(九月十三日)	丁未	不	不	略不得降者一切赦之
(九月十九日)	癸丑	不	不	皇后毛氏卒
十二月(十一月十八日)	壬子	不	不	月犯熒惑
(十一月二十三日)	丁巳	不	不	葬悼毛后于愍陵
(十一月二十五日)	己未	不	不	營洛陽南委粟山為丙丘
景初二	春正月	不	不	冬至、始祀
二月(一月十一日)	癸卯	不	不	置襄陽南部都尉
(二月二十一日)	癸丑	不	不	有司奏文昭皇后立廟京都
四月(三月九日)	庚子	不	不	詔太尉司馬宣王帥眾討遼
(三月十一日)	壬寅	不	不	東
				以三太中大夫韓暨為司徒
				月犯心距星、又犯心中中央大
				星
				司徒韓暨薨
				分沛國十縣為汝陰郡

景初三	正月初(十二月一日)	丁亥	不	帝病甚乃立為皇太子、是日即皇帝位、大赦尊皇后為皇太后、帝崩于嘉福殿、葬高平陵、以太尉為太傅、西城重訊獻火浣布、以征東將軍滿寵為太尉、
	二月(二月二十一日)	癸丑	不	
	三月	丁丑	不	
	閏月	乙丑	不	帝寢疾不豫
	十二月(十一月九日)	辛巳	不	立皇后、賜天下男子爵人二級、鰥寡孤獨穀、以燕王字為大將軍、
	(十一月二十四日)	甲申	不	以武衛將軍曹爽代之
	(十二月二十七日)			
	十一月(十月二十四日)	壬午	不	以司空衛臻為司徒、司隸校尉崔林為司空、
	閏月			月犯心中大星、
	十一月(十一月九日)	乙丑	不	帝寢疾不豫
	(十一月二十四日)	辛巳	不	立皇后、賜天下男子爵人二級、鰥寡孤獨穀、以燕王字為大將軍、
	(十二月二十七日)	甲申	不	以武衛將軍曹爽代之
	(八月二十三日)	壬午	合	之當流星所墜斬淵父子、(魏志 公孫度傳)
	(八月七日)	景寅	合	有芒彗、從首山東北流墜襄平城東南、(晉書天文志)淵眾潰、與其子脩將數百騎突圍東南走、大兵急擊之、
	五月(四月十五日)	乙亥	不	有彗星一見張宿、
	四月(三月十九日)	庚戌	不	大赦
	八月(八月七日)	丙寅	合	司馬宣王圍公孫淵於襄平、大破之、(魏志)
	八月(七月二十四日)	癸丑	不	有彗星一見張宿、
	五月(四月十五日)	乙亥	不	有彗星一見張宿、
	四月(三月十九日)	庚戌	不	大赦

正始四	正始三	正始二	正始元	
冬十二月 五月(朔)	七月(七月十九日) (七月二十日)	六月(六月二十八日) (閏六月七日)	二月(二月十五日) (二月十六日) (二月十六日) (三月十六日)	六月 秋七月 八月 十月 十二月
乙卯	甲申 乙酉	辛丑 己酉	乙丑 丙寅 丙寅 丙戌	
合	合	合	不	
立皇后甄氏、大赦 日有食之、既 倭国女王倭弥呼遣使奉献	南安郡地震 以領軍將軍蔣濟為太尉	吳軍田、襄陽之樊城、退 以征東將軍王凌為車騎將 軍	劉放為侍中中書令、孫資為 左右光祿大夫 詔令獄官、亟平冤枉理出輕微 群公卿士讜言嘉謀、各悉乃心 為新汝南豐郡以居流民 車騎將軍黃權薨 詔 車駕巡省洛陽界	以遼東東沓東夷吏渡海居 齊郡界 上始親臨朝聽公卿奏事 大赦 以黃權為車騎將軍 詔以建寅之月為正始元年 正月、以建丑月為後十二 月

正始五	四月(四月一日) 五月(五月八日) (五月二十一日) 十一月(十一月二十一日) (十一月二十七日)	丙辰 癸巳 丙午 癸卯 己酉	合 合 合 合 合	日有蝕之 講尚書 大軍將曹爽引軍還 詔祀故尚書令荀攸於太祖廟 庭 復秦國為京兆郡
-----	---	----------------------------	-----------------------	---

右の表で明らかなように、景初元年から景初三年にいたる三年間の干支はすべて一ヶ月ずれて、当該の月にはその干支なく、前月にある。月を一ヶ月早めても干支は超越することはないからこれは当然のことである。唯その間に、司馬懿が遼東の公孫淵を討伐し、文懿とその子脩の二人の首を斬った八月丙寅と壬午の二回のみが合致するのは、洛陽で使用していた景初曆でない夏正による報告を行ったものを、修史の際に、景初曆に換算することなく、そのままの八月の月と干支をそのまま魏志明帝紀、公孫度伝、晉書天文志に採録したものと理解すべきであろう。

問題は景初二年十二月と景初三年正月とは夏正と殷歴とは全く同一の日時の記事となるので十二月乙丑の発病を夏正の十一月九日とすべきか殷歴の十二月九日とすべきは、果して何れであったか三正綜覧には十二月はないので、景初歴の十二月であったとすべきであろうか。若しそうであれば明帝の崩御は景初三年春正月丁亥で、太陽曆の西紀二三九年一月二十二日であった。魏志には「時年三十六」と記し、裴松之の註に文昭甄皇后紀所引の魏略により、

「案魏武、以建安九年八月<sup>二</sup>定鄴。文帝初納<sup>三</sup>甄后、明帝<sup>四</sup>以三十年<sup>五</sup>生、計至<sup>六</sup>此年正月<sup>七</sup>、整三十四年耳、時改<sup>八</sup>正朔<sup>九</sup>、以<sup>一〇</sup>故年十二月<sup>一一</sup>、為<sup>一二</sup>今年正月<sup>一三</sup>、可<sup>一四</sup>疆<sup>一五</sup>名三十五年<sup>一六</sup>、不<sup>一七</sup>得<sup>一八</sup>三十六<sup>一九</sup>也」

と。景初三年正月を一年として加えたのは蓋し正論とすべきであろう。丁亥朔一日は一年に通ずる一日であったのである。残りの一年は延康・黄初を各一年づつに数えた史官の失であろうか。また景初三年紀に殆んど月はあるても干支が記されていないのも、夏正に復したことに起因し、晋書に景初元年と三年の両年紀を立て得なかったのも景初歴改廃に伴う混乱のいたすところであろう。邪馬台国女王の遣使時期に異論があるのもこれを反映し、その実際の遣使時期は、夏正の景初三年十二月、景初曆による正始元年正月であった。

## 二、烏丸鮮卑東夷伝の性格

三国志魏書卷三〇の烏丸鮮卑東夷伝には、魏略西戎伝の全文三〇三二字が一字の省略もなく、その註として裴松之がこれを載せた。魏書に東夷伝があつて西戎伝がないのは、陳寿が魏書に烏丸鮮卑東夷伝の意義を強く認めたためによるものであらう。

魏吳蜀漢三国鼎立の際、特に魏吳兩國にとって、東方の諸勢力の援用を考えることは当然のことと言わなければならない。由来中国には、北・東・西の三方面の塞外民族の力が如何に中原の角逐に重要な関連を持つかは、陳寿が烏丸鮮卑東夷伝の冒頭に述べた通りである。魏吳兩國にとってはその覇権確立に東夷が決定的影響を持つものと受取ら

れた。

特に北方にあつてこれらの烏丸鮮卑東夷諸国に地を接した魏にとっては、政治的軍事的に極めて重要な意義を持つものであり、これがために烏丸鮮卑東夷伝が設けられたのである。

中華思想は中国の伝統的思想である。しかも、その背景には、現実には東夷西戎南蛮北狄という夷狄の存在に因縁するものである。討伐・招撫・帰義・内附・冊封・藩屏・納貢・朝賀奉獻などその結果として行われる。宮内省書陵部所蔵の紹熙版三国志魏志烏丸鮮卑東夷伝第三十には、烏丸伝・鮮卑伝・軻比能伝・東夷伝・夫余伝・高句麗伝・東沃沮伝・挹婁伝・濊伝・韓伝・辰韓伝・弁辰伝(重出)・倭人伝の計十四の伝の見出しを附しているが、要はその何れの伝も、魏と如何なる関係があつたかにつき、即ち討伐・招撫・帰義内附・朝獻・納貢の史実につき漢末以来の魏代の動向につき、時に反復と思われるまでに述べられている。魏側からすればそれに対し拝飯賜与であり、冊封体制の確立であつた。

本論に関係あるものとして、遼東・高句麗・濊・韓などの討伐過程につき次節にその史実を明らかにしたい。

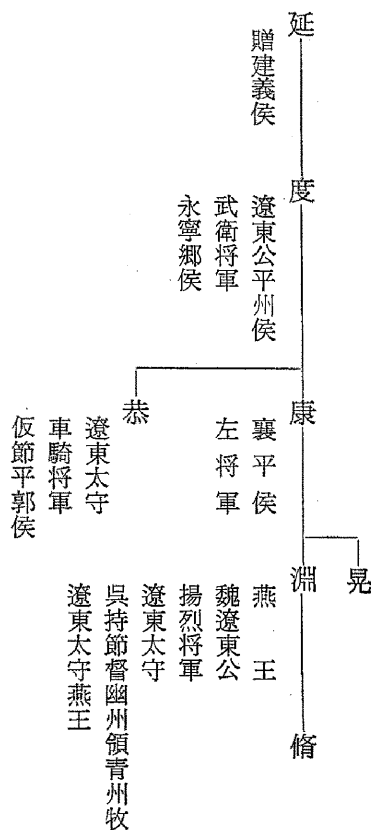
## 三、魏の東方経略

### 1 遼東公孫氏の討平

魏志卷八 公孫度伝に

「始度以<sup>一</sup>中平六年<sup>二</sup>、拋<sup>三</sup>遼東<sup>四</sup>至<sup>五</sup>遼三<sup>六</sup>世凡五十年而滅<sup>七</sup>」と記し、公

孫氏の世系は次の如きものである。



後漢初平元年（一九〇）公孫度は中国の擾攘を知つて遼東襄平に於て自立を圖かつた。建安九年に康が後をつぎ、十二年（二〇七）魏の太祖が上谷・右北平・烏延の三郡烏丸を征して柳城を屠つた際、袁尚は遼東に奔り公孫度に頼つた。度は袁尚らの首を曹操の許に送り届けた。この功により康は襄平侯左將軍に任じられた。康の死に依り、子の晃淵ともに若かつたので、恭が衆に推されて遼東太守となり、魏の文帝は恭を車騎將軍假節平郭侯に封じた。太和二年（二二八）にいたり淵が恭に代り、魏の明帝は翌年淵を揚烈將軍遼東太守に任じた。そして二三八年に遼東が滅ぼされる迄の十年間の遼東支配であつたが、この間に吳魏兩國の霸權確立の争の犠牲となり、遂に滅亡するのである。

先づ吳の孫權が二二九年黃竜と改元、天命を得たものとして皇帝の位につき、直ちに翌五月遼東に使者を送つた。吳志卷二黃竜元年の条

五月使<sub>レ</sub>校尉張剛・管篤之<sub>二</sub>遼東<sub>一</sub>。

と。さらに三年後の嘉禾元年（二三二）三月にも、「遣<sub>二</sub>將軍用賀校尉裴

潛<sub>二</sub>乘<sub>レ</sub>海之<sub>二</sub>遼東<sub>一</sub>。

と第二回目の使者を派遣した。この引續いての二回にわたる使者の到来に依つて、公孫淵は、冬十月吳に通じたのである。

吳志卷二 嘉禾元年十月の条

魏遼東太守公孫淵、遣<sub>二</sub>校尉宿舒・閭中令孫綜<sub>一</sub>、称藩於權、并献<sub>二</sub>貂・馬<sub>一</sub>。權大悦。加<sub>二</sub>淵爵位<sub>一</sub>。

と。これに対し、孫權は翌二年正月の詔に

「今使持節都督幽州領青州牧遼東太守燕王、久嚙<sub>二</sub>賊虜<sub>一</sub>。隔在<sub>二</sub>一方、雖<sub>二</sub>乃心<sub>二</sub>於國<sub>一</sub>、其路靡<sub>レ</sub>緣、今因<sub>二</sub>天命<sub>一</sub>、遠遣<sub>二</sub>三使<sub>一</sub>、欵誠顯露、章表殷勤、朕之得<sub>レ</sub>此、何喜如<sub>レ</sub>之（中略）其明下<sub>二</sub>三州郡<sub>一</sub>、咸使<sub>二</sub>聞知<sub>一</sub>。特下<sub>二</sub>燕國<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>宣詔恩<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>普天率土<sub>一</sub>、備聞<sub>二</sub>斯慶<sub>一</sub>。

と、非常な喜び方であつた。そして三月に、宿舒・孫綜の帰國に際し、第三回目の使者として太常張弥・執金吾許晏・將軍賀達らを遣わし、兵万人を率いて金宝珍貨九錫を公孫淵に授けた。この時公孫淵に贈つた孫權の詔の全文が裴松之所引註の江表伝の中に載せられて居り、九錫の内容を明らかにしている。即ち幽青二州十七県七十県の燕王に封じ、大輅戎輅玄牡二駟袞冕之服、赤舄、朱戸、虎賁之士百人、鉄鉞各一、彤弓一彤矢百、玃弓十、玃矢千、矩矱一、直珪鑽などを贈つた。

この時吳の大臣丞相らは公孫淵のまだ十分に信ずべからざる事を述べて孫權の自重を促したが、果して公孫淵はこの吳の使者等の首を斬

り上表をもって魏の都にもたらした。その使者は西曹掾の公孫珩であった。孫権の贈った印綬・策命・九錫・什物の凡てをもちたらしめて身の潔白の証明にせんとし、魏への忠誠を示した心算であつたろうが、是が魏には背側の脅威に感じられ、やがて遼東討滅作戦の遠因となつたことは否めない。西曹掾という官職は、後に邪馬台国への帯方郡の使者塞曹掾史張政と対比して注目してよいであらう。公孫珩は公孫淵の親信の者かと思われる。一〇五四字という魏への淵の上表文中に、「有非常之過、亦有非常之功」とのべて弁解の辞とした。明帝は淵を大司馬楽浪公に封じ、持節領郡は従前通りであつた。しかし、四年後には魏からの討伐を受け滅亡するのである。

孫権は公孫淵が使者を斬りこれを魏に送つたことを大いに怒り、自ら遼東征伐に向わんとしたが、尚書僕射の薛綜らが切諫して中止させた。魏志卷三、青竜四年七月の条に

秋七月、高句驪王宮、斬送孫権使胡衛等首詣幽州。

とある。遼東の籠絡に失敗した後も、呉はさらに高句驪との連携に出たのである。

これより先、呉が遼東に張弥らを遣わした際、中使の秦旦・張群・杜徳・黄疆らの吏兵六十人が玄菟郡に配置された。その中の秦旦と黄疆は高句驪に達した。これがために呉と高句驪との連絡がつき、高句驪王宮は皂衣二十五人を送り秦旦等を通じて表を奉り臣と称した。その際貂皮千枚と鷄鵝皮十具を贈った。これに対し、呉は高句驪王宮に対し、使者の謝宏と中書の陳恂を遣わし、單于の称号を贈り、衣服珍

宝を賜った。謝宏の帰国に際し、馬八十疋を贈った。青竜元年(嘉禾二)のことである。このように呉は高句驪との連絡をはかったが、その後も呉からの使者があつたが青竜四年胡衛らの首を幽州刺史の許に送つた。

魏は数回数年にわたる呉のこのような遼東高句驪への働きかけに対し、討呉の兵を動かす前に、遼東を先づ制する必要を痛感し、景初元年毋丘儉を討伐に遣わした。

魏志 明帝紀 景初元年の条

秋七月丁卯、孫権遣將朱然等二万人圍江夏郡、荊州刺史胡質等擊之。然退走。初權遣使浮海、与高句驪通。欲襲遼東。遣幽州刺史毋丘儉、率諸軍及鮮卑烏丸、屯遼東南界、璽書徵公孫淵。淵發兵反儉。進軍討之。会連雨十日、遼水大漲、詔儉引軍還右北平。烏丸單于寇婁敦、遼西烏丸都督王護留等、居遼東率部衆、随儉内附。(中略)淵、自儉還自立、為燕王。置百官、称紹漢元年。

と。この第一回の遼東討伐は成功しなかったが、直ちに陣容を強化して第二回の討伐が敢行された。「二年春正月、詔太尉司馬宣王、帥衆討遼東」と。干宝晋紀によれば、司馬懿に対し明帝は討伐の所要日数を尋ねた。これに対し、「往百日、攻百日、還百日、以六十日為休息」と、一年がかりの計画を返答した。毋丘儉はこの時副として、発兵四万人であつた。魏志明帝紀に

秋八月、丙寅司馬宣王圍公孫淵於襄平。大破之。伝淵首于京都。



海東諸郡平。

と。魏志卷三十 高句驪伝に

景初二年、太尉司馬宣王率衆討公孫淵。官遣主簿大加將數千人助軍。

と。また母丘儉伝に

帝遣太尉司馬宣王統中軍及儉等衆數萬、討淵定遼東。儉以功進封安邑侯食邑三千九百戶。

とある。晋書卷一宣帝紀には詳細な戦況をのせている。「昼夜攻之、時有三長星、色白、有芒鬣、自襄平城西南、流于東北、墜于梁水」と。また、「文懿(淵)攻南田突出、帝縱兵擊敗之、斬于梁水之上星墜之所」と。

資治通鑑卷七十四、魏紀六、景初二年の条

壬午、襄平潰、淵与子脩將數百騎突圍東南走、大兵急擊之、斬淵父子於梁水之上。

と。晋書卷十二、志第二天文中にも、

八月景寅、夜有三大流星、長數十丈、白色、有芒鬣、從首山東北流墜襄平城東南、占曰、圍城而有流星來走。城上及墜城中者破。又曰、星墜当其下有戰場。又曰、星所墜国易姓。九月文懿突圍走至三星墜所、被斬、屠城坑其衆。

と。八月の丙寅、壬午は現地の夏正、九月とあるは都の殷歴景初歴によったものである。八月壬午淵の首を斬った日から都に還った正月丁亥の日まで所要百十五日である。

晋書卷一宣帝紀には、明帝の崩御前の数日間につき次の如く記している。即ち、

先是、便道鎮関中、及次白屋、有詔召帝、三日之間詔書五至。手詔曰、「間側息。望到、到便直排閣入視吾面。」帝大遽乃乘追鋒車、昼夜兼行、自白屋四百余里、一宿而至、引入嘉福殿臥内、升御床。帝流涕。問疾。天子執帝手、目齊王曰、「以後事相託、死乃復可忍。吾忍死待君、得相見、無所復恨矣。」

と。景初二年十二月九日乙丑明帝発病より景初三年正月丁亥帝崩御までの日数は二十二日まことに劇的な慌しい旬日であった。劉放伝註の世語に詳しい事情が記されている。丁亥の日は西紀二三九年一月二十二日である。景初三年正月丁亥というのは、この景初三年には十二月が二回あり、三正綜覧によれば十二月は正月の前と後十二月と二回あり、正月の前の十二月丁亥で、これを景初三年正月丁亥といふのである。司馬宣王は白屋から四百余里のところ一宿したのみで昼夜兼行で都についたのである。

遼東平いだ後、「海東諸国平」とあるは、楽浪郡・帶方郡・濊貊韓の諸国を指すもので、遼東の平定された情報が帶方太守劉昕、楽浪太守鮮于嗣の討伐の報と共に邪馬台国女王の許に届いたのは景初二年末か三年で、魏志卷三〇東夷韓伝に次の如くある。

景初中、明帝密遣帶方太守劉昕・楽浪太守鮮于嗣、越海、定三郡。

## 2 高句驪征伐

魏の高句驪征伐については池内宏博士の詳細な論考「曹魏の東方経略」がある。<sup>(1)</sup>

高句驪王宮が孫權から单于号を授けられ一旦は呉に臣節をとつたのであるが、青竜四年幽州刺史の諷旨を受けて態度を変え、孫權からの使者胡衛らの首を斬り幽州に届けた。

景初二年の公孫氏討伐に際して王宮はこれに協力し、背後から司馬宣王の軍を支援した。魏志卷三〇高句驪伝に次の如くある。

位宮有<sub>二</sub>力勇<sub>一</sub>、便<sub>二</sub>鞍馬<sub>一</sub>、善<sub>二</sub>騎射<sub>一</sub>。景初二年太尉司馬宣王率<sub>レ</sub>衆討<sub>二</sub>公孫淵<sub>一</sub>。宮遣<sub>二</sub>主簿大加<sub>一</sub>将<sub>二</sub>数千<sub>一</sub>人、助<sub>レ</sub>軍。正始三年宮寇<sub>二</sub>西安平<sub>一</sub>。其五年為<sub>二</sub>幽州刺史母丘儉<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>殺。語在<sub>二</sub>儉伝<sub>一</sub>。

また、魏志卷二八母丘儉伝に

正始中、儉以<sub>二</sub>高句驪数<sub>一</sub>侵叛<sub>一</sub>、督<sub>二</sub>諸軍步騎万人<sub>一</sub>、出<sub>二</sub>玄菟<sub>一</sub>、從<sub>二</sub>諸道<sub>一</sub>討<sub>レ</sub>之。句驪王宮、将<sub>二</sub>步騎二万人<sub>一</sub>、進<sub>二</sub>軍沸流水上<sub>一</sub>、大戰<sub>二</sub>梁口<sub>一</sub>、儉遂東馬懸車、以登<sub>二</sub>丸都<sub>一</sub>、屠<sub>二</sub>句驪所<sub>レ</sub>都<sub>一</sub>、斬獲首虜以<sub>レ</sub>千数。  
(中略)儉引<sub>レ</sub>軍還。(正始)六年復征<sub>レ</sub>之。宮奔<sub>二</sub>買溝<sub>一</sub>。儉遣<sub>二</sub>玄菟太守王頎<sub>一</sub>追<sub>レ</sub>之。過<sub>二</sub>沃沮千有余里<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>肅慎氏南界<sub>一</sub>。刻<sub>レ</sub>石紀<sub>レ</sub>功。刊<sub>二</sub>丸都之山<sub>一</sub>、銘<sub>二</sub>不耐之城<sub>一</sub>。諸所<sub>レ</sub>誅納<sub>二</sub>八千余口<sub>一</sub>。

と。この母丘儉伝に記す刻石紀功関係の碑文が一九〇六年(明治三十九)九月、署奉天輯安県事花翎候補同知呉光国によって、県治の西北九十里の板石嶺に於て道路開鑿の際発見された。呉光国は断碑四十八字と言ひ、王国維は五十字と称するが、次の如く刻されている。

(第一行) 正始三年高句驪反



母丘儉断碑 京都大学人文科学部所蔵拓本(内藤湖南博士旧蔵)

(第二行) 督七牙門討句驪五<sup>年?</sup> <sup>師?</sup>

(第三行) 復遺寇六年五月旋<sup>師?</sup>

(第四行) 討寇將軍魏烏丸单于寇<sup>の</sup>

(第五行) 威寇將軍都亭侯<sup>公?</sup>

(第六行) 行裨將軍領玄<sup>夷?</sup>

(第七行) 裨將軍<sup>領?</sup>

と。七牙門を督したことから欠損部分に恐らく、「行裨將軍領帶方太守弓遵」と推定される第八行目があったものである。第六行は行裨將軍領玄菟太守王頎、第七行は行裨將軍領樂浪太守劉茂であろう。第五行につき、王國維は「魏母丘儉丸都山紀功石刻跋」に於て「威寇將軍都定侯不知何人」としているが、都亭侯公孫瓚がいるが時代合致せず、恐らく劉放の子であろう。第四行は討寇將軍魏烏丸单于寇婁敦であり、王國維は青龍年間に母丘儉に降ったとしているが、その降伏は景初元年である。第三行は六年五月旋師であろう。池内博士は第一行末字を寇にあてているが反であろう。第二行末字は六ではなく五である。また儉遂奔買溝としているが、儉でなく高句驪王宮である。母丘儉の旋師は六年五月、紀功刻石はこの時のものである。母丘儉の

魏志卷二十八 母丘儉伝には次の如くある。

(正始) 六年復征之。宮遂奔買溝。儉遣玄菟太守王頎追之。過沃沮千有余里。至肅慎氏南界。刻石紀功。刊丸都之山。銘不耐之城。所誅納八千余口。論功受賞。侯者百余人。穿山漑灌。民賴其利。遷左將軍假節監州諸軍事領州刺史。転為

鎮南將軍。

と。魏志卷四 齊王芳紀正始七年の条

春二月、幽州刺史母丘儉討高句驪、夏五月討濊貊。皆破之。韓那奚等數十國、各率種落降。

と。資治通鑑卷七十五 邵陵厲公中に

正始七年春二月、幽州刺史母丘儉以高句驪王位宮數為侵叛、督諸軍討之。位宮敗走。儉遂屠丸都。斬獲首虜以千數。(中略) 位宮單將妻子逃竄。儉引軍還。未幾復擊之。位宮遂奔買溝。儉遣玄菟太守王頎追之。過沃沮千有余里。至肅慎氏南界。刻石紀功而還。所誅納八千余口。論功受賞侯者百余人。

とある。北史にも「六年儉復討之」とあり母丘儉伝にも、「復征之」として高句驪征伐が五年六年と二回に亘って敗行されたようにも解釈出来るが、これは池内博士の考証の如く、儉自身の討伐は一回きりであり王頎をして位宮を追ったのと合せて二回であろう。時間的にも都まで還って二回征伐に出掛けることは無理である。資治通鑑もこれを「未幾復擊之」として一旦逃げた位宮をさらに王頎をして追わしめ肅慎の南界に到ったことを述べている。

池内博士が「刻石の断片に再征の役に触れた文字の見えないのは、それが母丘儉自ら出征した第一回の戦役のみの紀功碑と解すべきである。王頎の再征を被った高句驪王宮は沃沮の地に逃げこんだから王頎はそこに討ち入り更に肅慎氏の南界にまで宮を追ひつめた。母丘儉伝及び北史に肅慎氏の南界に到り、石を刻して功を紀すと記されている

紀功碑を建てたのは王頎であらう」(註2)と述べられている。

しかし北史、母丘儉伝とも、儉のことを記しているので、王頎が刻石紀功したのではなく、王頎の肅慎氏の南界に到ったに続けて刻石紀功を読むべきではなく、王頎が肅慎氏の南界に到ったことで文を切り、刻石紀功して還ったものは儉であるように私は解する。実際問題として刻石紀功の如きは部下の一部将のよくなし得る性質のものではあるまい。

王国維は丸都山紀功石刻跋(觀堂集林 卷十六)の中に

「掘此二書(魏志)則母丘儉刻石凡三处、一肅慎南界、二不耐城、三丸都山也。肅慎南界在今朝鮮吉林之境、不耐城在朝鮮東海岸、丸都山無可考。襄見吳太令跋此刻、謂此刻出土之板石嶺高六百余丈車馬不通、疑即古之丸都山。(中略)吳氏以輯安西北之板石嶺為丸都。以此刻為丸都之銘。其說近是。

と述べ、紀功碑三所説をとり、池内博士も王頎の肅慎南界に建てたものを含めて三カ所説を説かれるが、資治通鑑は肅慎南界と刻石紀功を分離している。私も到肅慎南界と刻石紀功とはなし、板石嶺の丸都山と沃沮の不耐城の二所に刻石紀功碑を建てたものと解する。翰苑雍公叢注で不耐城を「本漠而不而県也。漢書地理志不而県属渠浪郡、東部校尉治処」として魏志沃沮伝も東部校尉治処を不耐城とする。三国史記の高句麗本紀は、括地志を引き丸都山と不耐城と相接しているとするが、「満洲歴史地理(第一卷)は咸鏡南道徳源か永興の地に比定している。恐らく不耐城は永興付近にあったものであらう。母丘儉の再

征に当り、儉は不耐城を攻め、宮は北沃沮の買溝(鏡城付近)に奔ったので王頎をして之を追わしめ、他方南の濊貊に対しては劉茂・弓遵の二将を遣わしたのである。

丸都山につき白鳥庫吉博士は「丸都及国内城」に於て国内と丸都とは同一都城に対する二称とし、山城は通溝の北約三十町の山城子にあり石築の城壁が廻わされていたという。池内博士も「東馬懸車登丸都」は山城、「句驪所都」を平常の居城とされた。母丘儉は先づ宮の拠守した山城子山城を攻陥し、同時に丸都の中樞たる都城を残破し、帰途展望の広豁なる板石嶺の峠を下して彼の紀功碑を建てたものであらうとされている。

満州最古のこの碑の残欠部分の将来の出土を期待したい。幽州刺史隸下の玄菟太守王頎渠浪太守劉茂、帯方太守弓遵の名を列挙しているものと思われ、碑の残欠部分には母丘儉自らの名も刻されていたものであらう。

### 3 濊貊・韓の攻略

朝鮮半島は古来半島のもつ宿命的とも言うべき命運のもとにおかれ、大陸に強大な勢力が興起する場合、必ずと言ってよい程その影響を受け、時に制圧服属されるのがその歴史の常と言ってよい。

漢の四郡の設置の際はもとより、遼東の公孫氏の興起の時も、その勢力は韓濊に及んだ。

魏志卷三〇、韓伝の条に

桓靈之末、韓濊疆盛、郡県不能制、民多流入韓國。建安中、公

孫康分屯有県以南荒地、為帶方郡。遣公孫模・張敞等、收集遺民。興兵伐韓濊。旧民稍出。是後倭韓遂属帶方。

とある。二世紀末わが国は帶方郡に属して遼東の支配下に入った。その頃の倭国は国内大いに乱れていたという。それが何に基づくものであろうか。しかし三世五十年にわたった公孫氏の遼東支配にも景初二年に明帝が司馬懿を遣わし討滅した際、半島は魏のために完全に制圧された。韓伝には前条に直ぐ続いて次の如く記されている。

景初中、明帝密遣帶方太守劉昕・樂浪太守鮮于嗣、越海定三郡。この結果、諸韓国の酋帥である臣智に邑君の印綬を賜わり、臣智の下者には邑長の印綬を授けた。多分これらは銅印であらう。

一方、濊貊の地方はもとと高句驪と同一種族に属するが、南は辰韓北は高句驪沃沮と接している地である。正始五年の毋丘儉の高句驪征伐の余波は直ちにこの地に及んだ。濊伝には、

正始六年、樂浪太守劉茂、帶方太守弓遵、以領東濊属句驪、興師伐之。不耐侯等举邑降。其八年詣闕朝貢。詔更拜不耐濊王。居処雜在民間。四時詣郡朝謁。一郡有三軍役・賦調・供給・役使、遇之如民。

とあり、全く濊貊の地が魏、従って二郡の完全統治下に入って、軍役などにも駆り出されたのである。魏と言ってもそれは幽州刺史の支配下である。

魏志卷四齊王芳紀、正始七年春二月の条、幽州刺史毋丘儉討高句驪。夏五月討濊貊皆破之。韓那奚等数十国、各率種落降。

と。二郡太守らによる討伐は正始六年から正始七年五月まで続いたものであろう。濊貊ばかりでなく、韓の叛乱による討伐も引続いて起った。恐らくその叛乱の誘発は二郡太守の論功行賞に關しての行政区画の変更にあつた。

魏志卷三の韓伝に次の如くある。

部從事呉林、以樂浪本統韓國、分割辰韓八国、以与樂浪。吏詠ウツク転有異同。臣智激韓忿、攻帶方郡崎離宮。時太守弓遵・樂浪太守劉茂興兵伐之。遵戰死。二郡遂滅韓。

部從事は、州と郡との何れにも置かれてゐる。この部從事は幽州部從事であらう。池内・栗原・井上光貞博士ともにこの「部」を郡の譌と考えられてゐるようであるが、そうではあるまい。幽州部從事の呉林がもとの大樂浪郡時代に韓国をその統治下においたことがあつたので、辰韓十二国のうちの八国を割いて樂浪郡の所管とする行政措置を取つた。その際に郡吏の通訳がいよいよまぢまちで一定しなかつた。理由の説明に納得が得られなかつたことであらう。韓側にすれば辰韓から遠方樂浪郡への所属は納貢などに不利不便を伴つた。これがために韓が忿り、帶方郡の崎離宮を攻めこれが平定のため太守弓遵は戦死した。この戦の時期については、那珂通世博士、池内宏博士、三上次男博士、栗原朋信博士らの考定によつて正始七年五月の「韓那奚等数十国、各率種落降」の時とする説に従えたい。韓伝の「二郡遂滅韓」とあると同一史実を表わすものであらう。この齊王芳紀の「韓那奚等数十国」については、池内宏博士は「韓伝に挙げられてゐる辰韓十二国の国名

の一は冉奚であるが、那と冉とは書き誤まれそうな文字であろう<sup>(註3)</sup>とされているがそうではあるまい。卷子本翰苑百済の条に雍公叡は魏志を引いて、馬韓五十四国の名を列記し、その五十三番目の国に「不斯漬那奚他馬国」をあげている。齊王芳紀の那奚等數十国は恐らくこの馬韓五十三番目の国名中の那奚をとり「韓那奚等數十国各率種落降」と記したものであろう。後漢書は「馬韓在西、有五十四国」としている。莫盧国を重複して五十六国と記す現在の魏志と雍公叡の見た魏志とは異なったものと考えられる。宮内庁書陵部蔵宋紹熙版「臣幘活国」、和刻本「臣幘活国」を以て、「臣智激韓」忿に充当してゐるのもこれは宋代に於ける校訂の誤であり、臣智は韓の長帥である。「臣智韓の忿に激し」とか、「臣智激し韓も忿り」とか訓んで土着勢力官民ぐるみの叛乱を記した「臣智激韓忿」でなければ意味は通じない。この一句にこれまで二重の誤読があつたが、私は上記のように解説して、魏志齊王芳紀正始七年の条も、魏志韓伝もすんなり読める。「吏詛<sup>ウツタ</sup>転有異同」が契機となつて起つた戦乱であるが太守弓遵が戦死し、これと相前後して卑弥呼も戦死したのである。

#### 四、魏と倭国との関係

わが国はアジア大陸の東方海中に弓状に南西から東北に細長く走る島々からなるが、朝鮮半島とは至近距離にある。前漢武帝の四郡の設置以来、水準の高い漢文化が朝鮮半島を通して弥生文化時代にわが国に将来された。晋書樂志の鐸舞歌、唐書礼樂志の「鐸舞漢曲也」魏志

東夷伝韓伝の「有似鐸舞」とある如き文化もやがてわが国に伝わり、銅鐸の所産となりまた現在五面出土している陽燧に使用された多鈕細文鏡もこの時代にわが国に入った。<sup>(註4)</sup>

大陸半島とわが国との間の政治的動きの最初の記録は、前漢書地理志の二十字につづき、西紀四一年に祭彤が遼東太守に任命されたことが因となり、五十七年に倭奴国王が奉貢朝賀し、次ぎに半世紀後の一〇五年に遼東太守耿种が貂人を討伐して南下したことが因となり、永初元年(一〇七)に倭面土地王師升らが生口百六十人を献じた。時代の下るにつれてその速度が次第に早くなった。しかしこれらは半島に近い北九州の勢力であり、邪馬台国の遣使も恐らくこの延長線上のものと考えられる。しかもこの間後漢王室の衰微の結果、東方に対する統治力の弱体化から遼東公孫氏の自立を招き、遼東公孫氏の勢力の増大は、建安中の屯有県以南の地に、帯方郡七県の新置を見、やがて韓・倭ともに公孫氏に属することになったのは自然の成行きである。倭の邪馬台国は、公孫氏の滅亡を祝して、帯方郡を通して魏への朝献となつたのである。

さてこの頃の倭国内の乱れについては、後漢書東夷伝に「桓靈間倭国大乱、更相攻伐、歴年無主」とし、北史卷九十四「靈帝光和其国乱、相攻伐、歴年無主」とし梁書も光和中とし、魏志倭人伝に「其国本亦以男子<sup>二</sup>為王、住七八十年倭国乱、相攻伐歴年、乃共立一女子<sup>一</sup>と記すこのような動きは、遼東、帯方郡、諸韓国の動きとは無関係ではなからう。韓国に於ても、「桓靈之末、韓濊疆盛、郡県不能レ

制、民多流入<sup>三</sup>韓國。」となる状態にあった。即ち馬韓五十四国、辰韓十二国、弁韓十二国三韓合せて七十八国の韓国では馬韓が最も大きかった。馬韓が流移の人秦人にその東界の地を与えて辰(秦)韓を作った關係上、馬韓内の月支国を治める辰王が辰韓も併せ治めた。その上辰王は世襲でありながら、弁辰二十四国中の半数の十二国をも統治するという、馬韓弁韓辰韓の共立国王の体制が存在した。馬韓各国には長帥があつて大なるものは自ら臣智と自称し、小国では邑借と号した。特に馬・弁・秦韓の共立王の辰王は、「優呼臣雲遣支報安邪馭支漬臣離兒不例拘邪秦支廉」という二十二字の加号を持つ王であつたが、この長い称号は恐らく、共立国名の最初の一字をとり、最初の一字が他にある場合は二字目を取り、かくして共立を表わす辰王の尊号となつたものであると思う。上記の考で不明の呼遣馭例報の五字のみは、馬韓弁韓の国名にないものであるが、辰韓の国名が不明なところからこの五字は辰韓の十二国に關係の頭字であろうか、それともその支配を表わす文字であろうか。<sup>(註5)</sup>この辰王などの臣智は魏の冊封をうけて率善邑君・帰義侯・邑長の如き官名を授けられたのである。それ以外の臣下は中郎將・都尉・伯長などの官を授けられた。

上記のように韓國は複雑な政治体制に置かれ、弁辰十二国中の弁辰瀋盧国は倭と界を接し、弁辰と辰韓は雜居し、これがため、宋紹熙版の韓伝では弁辰国伝を重複して立て、弁辰韓合二十四国と記しながら、實際は二十六国、即ち軍弥国・馬延国を二重に記すような複雑な政治体制にあつた。こうした朝鮮半島に於ける政治体制や極東政局の動き

は極めて自然的な行きである。邪馬台關係の名称には卑弥・不弥・奴・盧などの韓国内の国名と類似した名称が付けられている。邪馬台国の問題の難解なもの、この韓国内の複雑にして且つ紛らしい政治体制を反映していることに一因があろう。

#### 1 魏の倭に賜与した官職爵位

殷曆による正始元年正月、夏正による景初三年十二月、邪馬台国女王が遼東討平と八歳の斉王芳の即位を祝して使者を朝賀せしめた。魏では卑弥呼に親魏倭王の金印紫綬、難升米に率善中郎將と銀印青綬、都市牛利に率善校尉銀印青綬を授けた。魏は後漢の制を継受したので、紫綬二采・青綬三采あれば、親魏倭王には恐らく紫白でない淳紫綬を、率善中郎將は淳青、率善校尉は青白綬であつたろうか。

西紀五七年正月辛未(八日)奴国王に漢制五字印「漢委奴国王」を授け、その二十七日後に光武帝は崩御した。この金印、吾丘衍の学古編に誤まれ、通常蛇鈕とされている。黒田藩の「黒田新統家譜」が金印にして螭鈕と述べている如く魚子地の螭鈕である。<sup>(註6)</sup>静嘉堂文庫所蔵「宣和集古印史」に宋代までのすべての鈕の類型三十種をあげているがその中にも蛇鈕はない。漢旧儀によれば皇帝玉璽は印材は玉、螭虎鈕、王侯は金印紫綬、秩比二千石以上は銀印青綬、比六百石以上は銅印黒綬、二百石以上は銅印黄綬である。宣和集古印史は漢代蛮夷王印十四個のうち亀鈕一〇、橐佗鈕四、魏晋のものは八個中亀鈕五、他は橐佗鈕である。「親魏倭王」は金印亀鈕と記され、藤貞幹の好古日録もうれをうけている。漢制による方一寸陰刻である。将来この「親魏

倭王」金印の発見の可能性もあろう。建武二十年光武帝から韓の廉斯  
 邑君に与えたものは銅印亀鈕であるから、「漢委奴国王」印も「親魏  
 倭王」印も破格のものである。親魏倭王にひとしきものは、大月氏王  
 波調に対し、明帝の太和三年十二月癸卯に大月氏王に与え、親魏王の  
 授例はこの二例のみである。

# 晋書卷一 正始元年の条

春正月、東倭重詔納貢、焉耆・危須諸国・弱水以南鮮卑名王皆遣使  
 来献。<sup>(註七)</sup>

とある。魏志に西戎伝を欠くため、焉耆危須に如何なる官品を賜与し  
 たかはもとより知るべくもなく魏略も危須国が焉耆に所屬すること  
 を単に述べているのみである。焉耆は延康年間にも于闐王と共に遣使貢  
 献し、焉耆王は太和元年十月、子を魏に入侍せしめた。しかし東亜の  
 政局から見て、親魏倭王に対するものは自ら別なものがあつた。それ  
 は二人の使者に与えた率善中郎將と率善校尉によつて伺い知られる。

中郎將の官職は、五官郎をすべる五官中郎將、虎賁を率えて宿衛を  
 司どる虎賁中郎將、左右中郎將、東西南北の四中郎將など一国一人秩  
 比二千石の高官、郡太守匹敵の官職である。その目的任務により種々  
 の雑中郎將がある。侍中・征東・鎮夷・破鮮卑・匈奴・司金・典農・武  
 衛・建義・輔義・督軍・建威・征虜・蕩寇・司市・司直・軍議・軍司  
 ・掌軍・副軍・平難の各中郎將と我が邪馬台女王の遣わした使者に率  
 善中郎將を与えた。正始元年に魏から贈つた夥しい賜品に应えて正始  
 四年に倭王は大夫の伊声耆掖邪狗ら八人を遣わし、恐らく倭国側とし

ても出来る限りの鄭重な貢獻を行つた際、使者らに一律に率善中郎將  
 を与えた。さきに与えた難升米と合せて九人に与えていることは、女  
 王卑弥呼の共立部落国家群の存在を証拠立て、いよいよ率善の意義を  
 明らかにしたものである。

率善の語を使ったものに、東夷伝韓伝に、「其官有魏率善邑君、歸  
 義侯、中郎將、都尉・伯長」とあり、韓國にも率善邑君があり、後漢  
 書百官志に、「四夷国王・率衆王・歸義侯・邑君・邑長皆有丞、比  
 郡県」とあり、永初三年の条に、雁門烏桓率衆王無何があり、率其  
 部衆の語は他にもその例があるが、率善の語は、韓國に於ける率善  
 邑君と邪馬台女王の使者に与えた率善中郎將率善校尉の他には史書に  
 は見当らないようである。

率善校尉についても、率善中郎將について述べたと同じ意味の率善  
 校尉であつて、魏が率善の意義を高く評価して与えた。校尉は武官で  
 ある。その種類を列举すれば、監軍・屯騎・越騎・歩兵・長水・射声  
 ・中壘・胡騎・虎賁・城門・嫖姚・護羌・護烏桓・護東夷・戊巳・領  
 南蛮・領南夷・護西羌・護西域・寧蛮・三巴・忠義・五官・典軍・懷  
 義・折衝・翊軍・材官・驍騎・典農・司農・度支・建義・武衛・滅虜  
 ・建中・武猛・司隸・督軍・黑山・西国八校尉・東宮三校尉そして率  
 善校尉である。

率善の字を持つものに、韓伝の率善邑君のほか、秦漢印統にしろす、  
 晋烏丸率善邑長（駝鈕銅印黑綬）、晋鮮卑率善邑長（駝鈕銅印黑綬）があ  
 るが、倭の率善中郎將、率善校尉の銀印青綬に比すべくもない。魏が



与えた親魏倭王金印紫綬率善中郎将率善校尉の銀印青綬のような高い官職爵位を賜与したことはまこと異例である。

何故に魏は邪馬台国に対してこのような莫大な賜品、と鄭重な詔書印綬を賜与したものであろうか。魏の対吳政策上に、邪馬台国の動きを高く評価したものに外ならないであろう。正始元年正月の場合には遼東公孫氏の滅亡、正始四年正月の場合は高句麗王位宮の侵寇が伝えられ、これが討伐会師の議が論ぜられていたときであろう。中国の伝統的遠交近攻の政策がなかったとは言われないであろう。

魏は毋丘儉をして高句麗討伐を敢行したのが正始五年。そしてその余波は半島の全域、濊貊、韓の全域に波及し、半島に戦火の収まったのは正始七年五月であった。魏は六年倭の難升米に対して黄幢を授けた。同盟国邪馬台国に対して戦に起上れという鼓舞のしるしである。

折から半島に於ては帯方太守楽浪太守らの濊貊韓の討伐と期を同うしての攻勢を求めたものである。にも拘らずこの戦に帯方太守弓遵の戦死があり、倭は南匈奴国との戦の戦況報告に及んだ。匈奴国が呉の孫権と何らかの關係があつたかそれは明らかでない。これに対し帯方郡太守王頌は塞曹掾史張政を遣わし、魏の詔書と魏の土徳を得たる表現の黄幢をもって難升米に告諭した。

卷子本翰苑所引魏志の韓国の条に、那奚国と思われる国がある。魏志正始七年五月の条、「韓那奚等数十国、各率種落二降」とある。三韓七十八国、馬韓五十四国である。韓の数十国とは恐らく、半島韓の全諸国の叛乱の終りを記すものであろう。翌正始八年、倭の載斯烏越

らは帯方郡に赴いて、匈奴国との戦況報告を行った。この報告をうけた郡の当面の責任者塞曹掾史張政が、詔書と黄幢をもって倭に赴いた。後漢書百官志に、「皆置諸曹掾史」、本注曰、諸曹略如三公府曹。無東西曹」とある。遼東郡には西曹掾が置かれていた。内藤湖南博士の説かれる如く、張政の到着前、すでに卑弥呼は戦死していた。恐らく載斯烏越らの出発後の戦死であろう。その結果、女王共立国家は後継者男王に対し反対の争があり遂に臺与が位につき張政の檄を受けた。そして詔恩に答謝するため正始八年魏に朝獻の使を遣した。邪馬台国が九州に所在したためこのような八年中に洛陽にまで到着出来る時間的余裕があつたものであろう。

## 2 魏と邪馬台国と大倭

魏志倭人伝中に、難解の次の一句がある。

「国国有<sub>レ</sub>市。交易有<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>。使大倭監之。自<sub>二</sub>女王国<sub>一</sub>以北、特置一大率<sub>一</sub>、檢察。諸国忌<sub>二</sub>憚<sub>一</sub>之。」

主語が省略されている。この一句の主語に、魏・邪馬台国・大倭・女王国以北国々などを推当しても、判然とした説明がつかない。殊に、大倭の二字こそ、邪馬台国の所在を、大和説と九州説とに論争せしめる最大の難語である。

魏志東夷伝中に、国名の上に大を附したものに、魏略を引用した裴松之の註ともに、大胡・大月氏国（大月氏・月氏）・大夏国・大秦国（大秦）・大宛・大倭などである。鮮卑大人とよくあるが、大鮮卑や大韓などではない。中国自体に於ては、大漢・大魏・大周・大隋・大唐など自

尊の国号としてよく使用される。特に碑文などに多く見られ、京大人文学部所蔵河南開封圖書館藏石墓誌銘拓本の中には二三七の多きに達して、約半数王朝国号の上に大を附している。聖唐というものは僅か一枚であった。これからしても大倭は大倭国の意で、大人の意ではない。大人の語は烏丸・鮮卑・夫余・高句麗・沃沮・挹婁・倭の各伝に屢々使用している語で紛らしい語ではあるまい。

さて「使大倭監之」の一句の大倭の解釈については、菅政友・那珂通世・橋本増吉各博士の大人説、山田孝雄博士の大和朝廷説・喜田貞吉博士の大和朝廷またはその官吏とする説があり後段に、伊都国に駐在した一大率が刺史の如き職能を発揮することから、この大倭と一大率との関係は魏・帶方郡・諸韓国と邪馬台国との関係を考える上に極めて大切な一節で諸説の分かれるところとなったのである。

昭和三十六年二月十八日稿に於て植村清二先生は『魏志』倭人伝の一節について『なる論文を東方学に発表され、特に従来の論考で本論文と抵触するものはすべてこの論文によって訂正する旨附記されている。私はこの拙稿作成に当り先生より種々御指導を頂いたが、この難問の「使大倭監之」の一句について、「原史料即ち魏の使節の報告に於ては

今大倭監之（イマ大倭ノコレヲ監スルヤ）とあったものが、恐らく転写の際に今を令と誤まり、魏志若しくは魏略の撰者が、本来の意義を解し得ずこれを同義に用いられる使と改めたものであらう」と述べられている。

そして、

1 邪馬台国は北九州に存在すること

2 大和国家は畿内に存在すること

3 大倭は魏との通交の背後にあったこと

の三点を強調され、各項につき極めて妥当且つ精緻な論究を行われた。二者択一的な、邪馬台国が大和にあったか九州にあったかの疑問は、すべて上記の三点からすれば氷解する。敬服すべき高説である。特に考古学上の畿内に所在する前方後円墳や出土品の銅鏡三角縁神獸鏡の分布についても合理的な解釈を巨視的な立場から論ぜられている。そして邪馬台国と大倭との関係について、「邪馬台国の女王卑弥呼が、その使節を魏の首都洛陽に派遣して、親魏倭王の印綬を受け、魏もまた再度使を送ってこれに答えていることは、三世紀の極東外交史上の重要な事実である。しかも大倭は伊都国に一大率を置いて、その外交のすべてを監督していたのであるから、対外的には二重の関係があったことは疑うべからざる事実である」と述べられている。<sup>(註8)</sup>

紀年上の問題とも関係する所謂大和朝廷が何時成立することになったかは難問であるが、景初年間当時相当の勢力を持ち半島と交渉があり遼東公孫氏との関係もあったのではないかと想像される面がある。

遼東公孫氏の滅亡に際しては、その地理的位置から、邪馬台国より後れることは自然であり、新しい情報に逸早く朝賀奉獻した卑弥呼の使者に魏はその率先的な親善行為を高く評価して、同盟的な親魏倭王や率善中郎将率善校尉の官爵を授けた。遼東征伐の成功を祝した朝獻に

対する魏のうけ取り方は、齊王芳の制詔の中によく表現されている。

そして夥しい金帛錦罽刀鏡采物の賜与はその喜びの現われと見ることが出来る。伊都国に駐在した一大率によって臨津搜露された賜遺の物は一旦は女王の許に送られ、「不得差錯」とあるから文字通り受取っても大和朝廷の一大率によって承知されている此等のうちの若干がその後大和朝廷に献納されることがなかったろうか。天理市櫟本東大寺山古墳出土の中平刀なども今後検討されるべきものの一つである。<sup>(註9)</sup>

次ぎに邪馬台国の所在については帯方郡から一万二千里で、伊都国からは千五百里の距離しか残されていない。大倭の支配区域に入っている女王国以北の距離が里数で記され、魏の使者が伊都国に駐められたことも、大倭即ち大和朝廷派遣の一大率の性格から当然である。とまれ邪馬台国から伊都国間の距離は千五百里しか残されていない。大唐六典度支郎中の条の「凡陸行馬日七十里、歩及驢五十里」とあるによつて、一日五十里、陸行一ヶ月の距離にあった。この一ヶ月千五百里は極めて実際的なもので、三世紀の頃も八世紀も今も一日の人の物理的歩行行程はあまり変化しないものであろう。徳川時代も辰刻出發申刻投宿が多く大約八時間一日四十八里の行程で六典の歩五十里とほぼ等しい。上杉家蔵慶長二年瀬波郡絵図に岩船村上間十五里と記され當時湖沼を避けた山裾迂回の実際路里数である。伊都邪馬台間の千五百里はこの百倍にあたり、対馬・杵岐・末盧間の千余里より稍多い程度の距離であり、この事からも邪馬台国の所在は九州北半の地に比定さるべきであらう。当時の所要日数の陸行一ヶ月であらう。魏の当時の

里は清里一里の五分の三位に相当し比較的短距離の里である。南方投馬国については、周書の「以<sup>レ</sup>牛投<sup>レ</sup>牛、以<sup>レ</sup>馬投<sup>レ</sup>馬、以<sup>レ</sup>車捧<sup>レ</sup>車」という著名文句の発音を取った投馬があてられたもので、惡字、韓国類似語のほかに郡の使者に耳馴れたこのような語が使用されたのではあるまいか。

## 結 語

倭人伝はあくまで魏志の烏丸鮮卑東夷伝の中の倭人伝であり、東夷伝は魏志全体の中の一部をなす東夷伝である。従つて東亜の国際政局、換言すれば魏の呉に対する戦略上から取りあげられた東夷伝であるということが出来よう。魏略にある西戎伝が魏志に西戎伝を欠いた理由もその辺にある。従来倭人伝のみを切りはなして、わが国内の立場から邪馬台国を取り上げて来た憾みがなしとしない。しかし、飽くまで邪馬台国の問題は東亜全体の国際政局の大きな流れの中で考究されるべき性質のものと思う。

註(1) 池内宏「満鮮史研究」曹魏の東方経略 二五〇—二九三頁

(2) 同上 二五七頁

(3) 池内宏「満鮮史研究」「公孫氏の帯方郡設置と曹魏の楽浪帯方二郡」四七頁

(4) 陽燧については、「論衡」卷二に「陽遂取<sup>二</sup>火於天<sup>一</sup>、五月丙午日中之時云々」とある。

(5) 那珂通世「外交繹史」三韓考一二九頁にこの称号を韓の方言と考へ句読し難しとされている。白鳥庫吉博士は満州歴史地理第一卷四二頁に之を

「優呼臣雲の遣支報、安邪の蹶支漬、臣離の児不例、拘邪の秦支廉と訓み、優呼臣雲、安邪、臣拘邪を地名とし、遣支報、蹶支漬、児不例、秦支廉を職名或は称号と考えられている。

(6) 村瀬之熙「秋苑日渉」日本随筆全集巻一、三八二頁に螭鈕としている。長沙漢墓軟侯夫人墓出土の彩色帛棺の中に赤螭をえがき、竜の子で角のないものを画いている。史記司馬相如伝に赤螭論がある。

(7) 静嘉堂文庫所蔵宋版晋書には名王を石王にしている。尚お同所蔵宋版明嘉靖修本三国志には嘉靖十年刊、八年補刊、九年補刊があり、倭三十国列挙の一葉は一行十九字からはじまり十行目は二十五字詰で変則的字配りである。尚咸平六年単刻本呉志には嬪妃伝に未刻三葉がある。

(8) 植村清二「東方学」「魏志」倭人伝の一節について 六頁

(9) 梅原末治「大和文化研究」日本出土の漢中平の紀年太刀 一九頁。刀棟の金象嵌文字は、「中平□年五月丙午造作(文?)刀・百練清剛・上応星宿・下辟不祥」の吉祥文句が刻されている。中平四年五月丙午は太陽暦七月十二日に相当し、陽燧に最もふさわしい日にあたるか。十一字目は、大か支か文のいずれかに読まれよう。

(本学助教授・東洋史学)